

Title	山窩の生活, 鷹野彌三郎著
Sub Title	
Author	宮島, 貞亮(Miyajima, Teisuke)
Publisher	三田史学会
Publication year	1924
Jtitle	史学 Vol.3, No.4 (1924. 11) ,p.149(619)- 150(620)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19241100-0149

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

山窩の生活(鷹野彌三郎著) (二松堂發行)

山窩に對して眞面目の考究とそれが救済に心ある人々を犯罪者としての山窩を取扱ふ警察官及び裁判官等の一參考に供したいといふ著者の抱負の下に本書は生れたのである。著者は繁忙な操觚界にあつて、その活動のかたはら山窩の研究に従事せられ、かつて東京、大阪の諸新聞に發表したものを蒐めて最近上梓せられたのである。本書は純然たる學究的の著書とは稱し難きも、書中傾聽すべき點が多々ある。兎に角非常な興味を以て讀ませられた。著者の勞に對し謝意を表する。次に興味ある點二三を紹介することにする。山窩といふ名稱の起源に關しては從來傾聽すべき言がないが、著者も適確な斷案を下してをらない。

かの穢多に關し地方によりて「カハボウ」「カボウ」「チヨウリ」等随分種々な言ひ方をするが、山窩も種々な言ひ方がある。著者は云ふ、各地方に於ける山窩に對する方言を見るに「ボン」「ボンス」或は「オゲ」と稱する所がある。「ボン」「ボンス」等は飛彈、尾張、三河の各地で稱し「オゲ」とは美濃、近江、大和から加賀、丹波等にかけての地方で稱してゐる。又天幕生活、即ち「セブリ」をする所から「テント」と云つたり、箕直をする所から「箕直し」と云つたりする。これは關東から東北にかけて稱してゐる。

るが「テント」或は「箕直し」と云ふのは山窩なるがために、其れの方言名稱といふのではない。ただ表面現はれた彼等の職業行為から一般人が無意識に附したもので此の二稱は或は全國に廣がつてゐるものともいへる。「ボン」は昔、山番の事を「ボンス」と稱し、「ボン」は山の本、麓と云ふ事だといふから、是等の意味から來たものであらう。

「ボンス」の「ス」は無意義の附稱のやうである。「オゲ」とは果してどういふ處から出て來たものか全く不明であるが、此の言葉を研究したならばそれは何れかの地名であるか、又彼等の祖先の姓であるか、山窩の研究上非常に面白い發見をすることが出来るかも知れない。それに「オゲ」と稱してゐる地方が山城に近い國々であるだけに、山窩の族に關する研究上殊に興味深い事と思はれる。

次に山窩の巢窟は何處といふに、著者は靜岡縣、愛知縣、神奈川縣の一部及び岐阜縣の一部を擧げてゐる。其の特徴如何といふに、性質は獍猛殘忍であり、體軀は強健であり、竊盜の方法、兇器、言葉等全く他と異つてゐるさうである。

最後に彼等の特有の言葉は興味があるから次に擧げることにする。

オドツタ(狼狽すること) アヤメル(殺すこと) ドメル(埋め

る(こ)ラカン(逃走のこ)、ハッル(同意味)フケル(同意味)グチウマイ(よく饒舌るこ)シヤリ(米のこ)クリカラ(麥のこ)カン(物を平均に分配するこ)ホケナス(虚言を吐くこ)タンカガアカナイ(容易に白状せぬこ)カク(反物のこ)タンカガモロイ(直ぐ白状するこ)リウユウ(拘留されたこ)ウメアイ(兩刃の兇器のこ)ツゲ(入獄のこ)ツカレタ(察知されたこ)ノル(遠方の山間へ高飛のこ)イキ(何事も思ふ様になるこ)クヤ(賣り口に骨の折れた事)ヤク(同意味)ヤマカン(贓品を半折するこ)ベカナセル(壁を切るこ)ヒン(鍵のこ)ハコバ(停車場のこ)ワタシバ(警察署のこ)クギヌキカヤブン(典獄のこ)ボテ(看守長のこ)クリス(巡査のこ)

的等の言葉の語源がわかつたならば尙一層興味があらう。著者の此の方面の研究を切に望む。何には、こもあれ特殊部落研究者の是非一讀すべき著書であらう。

(宮島貞亮)

相州内郷村話

(鈴木重光編
郷土研究社發行)

かつて本誌上で紹介した柳田國男氏の『郷土誌論』の一章に相州内郷村の話があつて、これは郷土會の諸氏が我國最初の「村落調査」を試みた時の同氏の所感であるが、この同じ村の話が、いま同じ爐邊叢書の一冊としてあらはれた。

まづ村の位置とその名稱から説き始め、村における民間傳説や信仰に關する物語などをあげ、ついで獸の話、鳥の話、虫類の

話、植物の話においてはそれぞれの獸鳥虫類及び植物に關する民間の習俗、傳説、俚諺、童謡などを語り、更に面白い俗謡と兒童の遊詩を示し、また雜として禁厭、民間療法、謎々、早言葉、駄洒落、俚諺、言ひ習はし、年中行事を集録してゐる。村の話と言つても、村の歴史や行政や産業に關する記事ではなくして、専ら民間傳承に關するものゝ集録である。さうして讀者は、この點において單に内郷村の人々の生活を知るのみならず、ひろく一般日本民間の生活にもふれることができる。なんとなれば民間傳承はその土地に特有な地方色を有するこにも、また民間傳説の信仰の如きにおいてはひろく散布して一般に共通のものがあからである。要するに日本民衆の、すくなくともその精神生活を知る資料として、僅か百五十八頁にすぎない小冊子の本書は實に尊い價値を有するのであつて、普通人がつまらないと言つて蔑む田舎の生活においても、人間の住む場所であるかぎり、無限の研究材料とその興味とが藏されてゐるこを本書によつて教へられるのである。

(松本芳夫)

武藏野及其周圍

(鳥居龍藏著
磯部甲陽堂發行)

近來博士の多く發表さるゝ研究が我國人類學及び考古學界に大なる貢獻をなしたこは言ふまでもない。博士は今や其の外部的の研究と共に内部的にも我國の人類學的、考古學的、或は文化的研究を爲さるゝ時に達した如く思はれる。本書も博士近著の一であるが本書は博士も自序中に言はれてゐる如く學術的のものばか